

たせたこと、これらはマルキオンの独創的な仕事であった」（一六三頁）。ここに客観的な評価がある。

しかし、突飛な問いだとは思いますが、マルキオンが（福音の再ユダヤ化）を阻止するために、ユダヤ的なものを排除していったことは、キリスト教史の中で、ユダヤ人迫害に何らかの影響を与えたのかどうか。わたしは直接的な影響はなかったと考えている。むしろ、ユダヤ的なものを全て保持した、旧約聖書、新約聖書を正典として受容し、これらを予言の成就、キリストの復活信仰という視点から読んでいくのだとする「正統的教会」の側に、ユダヤ人迫害を認容する契機があると考えている。いずれこの課題も問い直したいものである。

わたしは、この限られた紙面で、本書に執筆されておられる方々の労作に対して、個々に取り上げて論じようと思っていたが、与えられた枚数をはるかに越えることになったので、いづれ別の機会に取りあげたいと思う。

本書は、Ⅰ「新約聖書正典前史」、Ⅱ「新約聖書正典の成立期」、Ⅲ「新約聖書正典の成立」の大枠の中で、主要な項目、人物について論じられている。Ⅰでは、パウロと四福音書における旧約聖書の受容、また伝承の問題を論じた「新約聖書の人々」（川島貞雄）。ポリュカルポス、第一クレメンヌス、イグナテイオスなどの使徒教父の旧約聖書の受容、新約諸文書の受容の具体例を示しながら、極めて明確に論じた「使徒教父」（青野太潮）。今まで多くの研究書を世に問い、今般正典史の中で、グノーシス派の「聖書」解釈（原理）、ヨハネによる福音書のグノーシス

的釈義の例も示した、編者でもある荒井献氏の「グノーシス派」。Ⅱでは、本書の中心というべき、新約聖書の正典化に大きな影響を与えた五名の人物、「マルキオン」（井谷嘉男）、「ユスティノス」（大貫隆）、「タティアノス」（大貫隆）、「テルトゥリアヌス」（井谷嘉男）が論じられている。Ⅲでは、教会が西方、東方教会と分かれたなかでの新約聖書正典化への具体的な経過が論じられている。「西方教会」を執筆した宮谷氏は、極めて具体的に論じている。「東方教会」と「教会会議」は三小田敏雄氏が担当している。本書の出版を喜ぶと共に、これが多くの方々に読まれることを祈るものである。

『聖 餐』

日本基督教団宣教研究所編

(B6版・二七八頁・一八〇〇円)

日本基督教団出版局刊・一九八七年

大阪聖和教会牧師 森田 喜之

日本基督教団宣教研究所は、教会・教職・聖礼典に関する見解の相違と対立が、各教区の活動に著しい影響を与えているという調査結果を得、これをむしろ積極的にとらえて、論議を掘

下げていく事を課題とした。なかでも様々な議論のある聖餐をとりあげ、一九八三年から三年余り五人の研究員が討議してきた。その成果が本書である。

第一部の雨宮栄一「ルター派教会における聖餐の問題」では、聖餐理解をまず問い、これを中心にすえて聖餐執行者と受領者の問題を検討している。今日の聖餐をめぐる議論のポイントをテーマとして取りあげ、ルター派の解釈が紹介されている点、我々の整理のための重要な資料となる。ただ今日提起されている問題とのもう一步踏み込んだ対話が充分でないのが残念である。

大崎節郎「改革派教会における聖餐の問題」では、第二スイス信条を觀察の軸としながら、聖餐は「しるし」であり、キリストの十字架と復活における我々のための神の自由な恩寵行為の現実性が、聖餐論の主題であるとす。そして聖礼典の完全性は制定者たる神の活動にのみ依存していて、陪餐者の信仰にも、執行者の資質にも依る事はないという。しかし他方、「改革派教会の慣習に従って、まず信仰告白を了し、かつ誠実な生活をしている者でなければ」陪餐は認められず、又執行者は、教会の秩序に従って説教の委託を受けた教職に限定されている。大崎氏の文脈では首尾一貫し完結したものととして扱われているが、この神の恩寵行為と、信仰の秩序というものの間に存在する論理的空隙にこそ、現在の聖餐をめぐる議論があらわれてくる素地があるのではないだろうか。

尾形隆文「現代神学における聖餐の問題」は、K・バルトの

『聖餐』（森田）

サクラメント理解の変化に焦点をあてて分析している。洗礼と聖餐にサクラメント的機能を帰していたバルトは晩年になって、サクラメント的機能をイエス・キリストの唯一回的な業と行為にのみ帰し、洗礼と聖餐をもっぱら人間の行為としての「応答・証言・宣教」または人間の側の「対応」として理解している。そうする事で、この教団や人間の行為が倫理的意味を持ちうるかと考えている。このようなバルトの変化を尾形氏は、洗礼・聖餐の「サクラメント的理解」を「キリスト論」と「倫理」へと分割し、精算し、無化したと言い、積極的に評価する。確かに、この「無化」は論理的純化として強烈な問題提起を含んでいる。しかし純化の過程で削り落された垢が、人間の弱さや感性であるようで、その過程を経た聖餐もまた現代の人間に生命力を与えるものとなるのかどうか疑問を感じるところである。

神田健次「合同教会における聖餐の問題」は、世界的広がりの中で、和解と一致のしるしとして聖餐論が大きな関心事となっている状況を背景に、エキュメニカルな視野を求めて論ぜられている。世界教会協議会、各教派の世界コミュニオン、そして合同・合同途上教会という、エキュメニカル運動の三つのレベルに分けて、まず前者二つの運動の中での聖餐論を簡単に評価も含めて紹介している。WCCのリマ文書については、聖餐理解の共通の源泉として聖書を重要視する等の一致に向けての動きとして高い評価をしているが、更につっこんだ細かな内容の議論は控えている。これは各教派の世界的コミュニオンに

おける聖餐論についても同様で、これらを参照しながら、単なる神学的合意のみならず相互陪餐を含む実質的合意をめざす合同教会における聖餐論に焦点をあて、特にカナダとドイツのそれを紹介しつつ論じている。カナダでは少数民族との共存を含む今日の宣教課題との関連で聖餐論が論ぜられ、ドイツではドイツ教会闘争の禍中でこれが提起され、更に新約学の積義的貢献によるところ大である事がそれぞれ紹介されている。これは神田氏が指摘する如く、日本基督教団が合同教会としての聖餐のあり方を論ずるに際して重要な視点を示唆している。

第一部最後の論文、村山盛忠「日本基督教団における聖餐の問題」は、まず教団におけるこの問題の歴史的背景を礼拝式文を軸にふりかえる。そして宣教論の視点から未受洗者陪餐を取りあげ、これを実施する三教会の例を紹介しながら、その積極的意味を探る。又教団成立史の関りから、二重教職制の問題と「救世団」合同加入時の礼典の強制とを取りあげている。これは村山氏の指摘の如く、聖礼典に介在する国家権力の問題であり、この歴史の責任を担わんとする模索の一つ一つを、我々は教会秩序、恵みの秩序の乱れとして切り捨てず、真剣に対話していくべきであろう。

第二部は以上の論文を担当した五氏による二回にわたる座談会の記録である。第一部において、すでに読み取る事のできる五氏の理解の違いが、ここではつきあわせられ、熱い議論が展開されている。現在、我々がかかえている問題の解答があるわけではないが、我々が論ずべき視点が示されていて非常に刺激

的である。難を言えば、議論が論文の延長で平行線をたどっているような印象をうける。論文で自己の視点や見解を明確にされた各氏が、あらためて自己検証されつつ議論はできなかったものかと残念に思う。ただ、自らを検証し直すとは、その属する教会の信仰共同体の形成に果す聖餐の役割を検証し直すという事でもあり、それは即ち信仰共同体の崩壊と再構築という非常に重い課題を担う事を意味する。従って、自己検証しつつ聖餐を問うという作業は、むしろ本書から多くの示唆と刺激を与えられた読者たる我々が担うべきものなのである。本書が多くの教会、信徒に読まれ、真剣な議論が喚起され、聖餐についての理解の深化と実践における充実がもたらされる事を期待する次第である。